

### 運営・企画担当より

2013年3月11日の14時30分頃、ある先生からおおよそ2年と1週間ぶりにメールが届きました。世間が黙祷の準備をしている頃、私はそれとはまったく別の理由で背筋がピンと伸びてしまいました。そのとき自宅の机に向かっていたことは覚えていますが、勉強していたのか、ゲームをして遊んでいたのかは覚えていません。そのメールと、添付されていたファイルを読み、急いで返信の内容を考えはじめました。いや、内容だけではなく、返信の文章のどこで韻を踏むか、どこで本歌取りを使うかも考えなければ。なにしろ、通り一遍の平板な文章を返してすむ相手ではありません。なんとか15時過ぎに返信し、以後、何通かやり取りをしました。

添付されていたのは、私が去年出した本に対するほぼ絶賛と言ってよい書評 (『図書新聞』掲載予定) でした。他方、メール本文では、研究者として私のふるまい方が「若い」と一喝されました。若い研究者に向かって「若い」と言っても一喝したことにはならないでしょう。私に対する「若い」が一喝になるのは、私もう若くないからにはほかなりません。

私も含めて、多くの若手・中堅研究者が実際以上に自分を若く見積もってしまう理由は大きく分けて二つあるように思います。一つめは、専任職がない、あるいは任期がついているといった境遇。年齢と研究業績がそれなりにあっても、こうした境遇におかれると「自分は駆け出しの若輩者にすぎない」という自己評価を下しがちです。二つめは、一つめと表裏をなす問題ですが、任期のついていない定職を得るために、学会誌への掲載を目指して学会 (「学界」とは微妙に異なります) からの評価を得ようとする。ずっと点数をつけられる立場にいることは、ずっと子どもでいることを意味します。とりわけその点数が低いものであった場合には、「先生方にもっと評価されるようにならなければ」という子どもの発想に陥りがちです。私個人のことを言えば、ニューズレター第17号 (2009年) に書いたように、プロとして発表している以上、どんなに低い点数をつけられて叩かれても堂々としていなければならないと自分に言い聞かせていました。

3月11日のメールは、その「子どもじみた堂々」をそろそろ卒業してよいという卒業証書のように思われました。

もちろん、子どもと大人は対等ではありません。子どもが大人を乗り越え、子どもでなくなるのは、大人から学ぶべきものを学んだ後でしかありません。しかし、学ぶべきことを学んだ人間がいつまでも子どもじみたふるまいをしていては困ります。次の世代が続いているのですから。私は学位を取ってから10年もの時間を子どもとして過ごしてしまいましたが、2013.3.11をもってようやく卒業証書を手にすることができました。

学会によっては、若手の登竜門と化し、評価 (批判) する側と評価 (批判) される側に完全に二分しているところがあります。これでは、評価 (批判) する側は自らを省みる機会がなく、評価 (批判) される側はいつまでも若いままです。このシステムの中では、お互いがいつまでもぬるま湯に浸っていられるのです。

私が運営を務めるあいだは、日本フランス語学会の例会やシンポジウムをそのような場にするつもりはありません。6月1日のシンポジウム「認知言語学の功罪」は、「哲学のおもしろさは、自分の主張が間違いである可能性、人から批判される可能性がものすごく高い地点で、それでも批判されないことを言ってやろうとするスリルにあります」(ACADEMIC ANIMAL 知的探求者たち「“考える”ほどスリリングな遊びはない」(前篇) 哲学者 野矢茂樹、2010年11月16日、<http://wedge.ismedia.jp/articles/-/1129>) ということを実演しようとしたものです。これからも、子どもから大人まで、それぞれがスリルを味わうことのできる運営を目指したいと思います。

(酒井 智宏)